

私のこれまでの半生は、一見してみればとても恵まれたものに見えるかもしれない。三十代後半にして一流企業の重役を務め、部下からの信頼も厚い。都心の郊外に一軒家を建て、妻と娘と三人で暮らしている。妻は鼻^{ひな}目に見ずとも魅力的な女性で、容姿内面ともに素晴らしい。娘は今年で五歳になり、幼い頃の私に似ていたずら好きが過ぎるくらいがあるが、人の気持ちを理解できる優しい子に育っている。三人で食卓を囲む毎日は穏やかなことこの上ない。今の生活は私にとって恵まれすぎたものとすら思える。

しかし、振り返ってみれば、私はこの人生の中で、常に次の二つのものに頭を悩ませてきた。一つ目は、実家の存在である。十八の時東京に出てきて以来、私は一度も実家に帰ったことがなかった。妻を実家へ挨拶に行かせたことさえない。このことを気にして妻は私の実家に行きたがるのだが、どうしても足が竦んでしまって、結局今まで行かず仕舞になっってしまった。

二つ目は、口紅である。これは妻にも理解されないし、私自身も本当に情けないことであると思う。しかし、未使用品であろうが、妻のものであるが、触れると我を忘れて叩き壊そうとしてしまうし、目にしただけでも寒気と身体の震えが止まらなくなる。口紅が怖いなんて、と笑われるだろうが、無理なものは無理なのだ。

この二つが私の幸せを蝕むのは、私の幼少期に起きたある出来事に起因している、それに関して、私は今もまだ後悔し続けているし、私自身を許していない。

大学入学を機に家を出るまで、私は山陰にある山村に住んでいた。だだっ広いが人口の少ない町で、家の周りには田んぼが広がり、四方が山で囲まれていた。冬になると雪が膝の高さまではすぐに積もり、酷い時には腰まで埋もれることもあった。雪が積もった日には、地域の人々総出で雪かきを行ったものである。

そんな町に、私は母と六歳年上の姉の三人で暮らしていた。田舎にありがちな広い納戸と客間と土間を持つ大きな一軒家は、私が生まれる少し前に亡くなった祖父が建てたと聞いている。両親は同じ保険会社に勤めていて、父は本社勤め、母は勧誘員をしていた。本社は県外にあるため父は単身赴任で盆正月くらいにしか会えなかったが、電話で話す機会は多く距離を感じることはなかった。人に大きな迷惑をかけるような悪事をするところびどく叱るような厳しい一面もあるものの二人ともいつも優しくかった。姉は電車で長いトンネルを通り抜けた先にある公立高校に通っていた。ずば抜けて裕福な

家庭だった訳ではない。しかし、穏やかに過ぎる日々は幸せだったと記憶している。

小学三年生の時の私は、五軒隣に住む一つ年下のタケシとよくつるんで遊んでいた。タケシはやんちゃな少年で、同じようにやんちゃでいたずら好きだった私とよく馬が合った。二人で寺の池の鯉を捕まえようとしてみたり、道路に落書きしてみたり、田んぼの畔あぜの草むらに二人で隠れていて、通行人が来たら飛び上がって驚かしたり。あの頃は本当に無邪気だった。たまに懐かしく思い出すことがある。

小学校へは毎日三十分かけて徒歩で通学していた。その通学路の途中に、他の民家から少し離れて一軒だけ、田んぼに囲まれて建っている家があった。葺ふかれた瓦が古くなって灰色になっており、土壁が所々剥がれ落ち始めているその民家は、しかし、大きさだけは破格で、村一番と言っても差し支えなかった。二階建てのどっしりとしたその構えは、山に囲まれた田園地帯の中で巨大な置き石のように存在感を發揮していた。

その家には、七十代位の夫婦が二人で住んでいると言われている。しかし、白髪で腰の曲がったお爺さんの方はたまに見かけるもの、お婆さんの方を私は一度も見たことがなかった。それはタケシ、そして近所の人たちも同じだったようで、近所では既に亡くなっているのではないかと噂されていた。

しかしお婆さんの葬式も何もまだ執り行われていなかったため、もしかするとボロボロの土壁に埋められてしまったのではないかと、というような不穏な話も時たま出ていた。

そんな噂も、まるつきり根拠がないという訳でもなかった。その家に住むお爺さんの方は、近所では変わり者として有名だった。田んぼに裸足で入って行って大声で意味を為さない言葉を叫ぶ、アスファルトの道路を掘り返そうとスコップを立てる、バケツ一杯に泥を持ち帰って自宅の玄関付近にばらまく等、とにかく奇妙な行動には事欠かない人だった。いつも死んだ魚のような眼をして無表情で一連の振る舞いをするため、一部の住人には怖がられていた。一応他人に直接迷惑がかかることはなかったため黙認されていたが、近所では厄介者として扱われていた。

そんなお爺さんには、むしろ私とタケシのような子供の方がよく話しかけていたと言っていた。はたから見てもおかしな行動をする人物だったが、怒鳴ったり、暴力を振るったりする人ではなかった。そして、極度に耳が遠く、こちらの言っていることはほとんど聞き取れないようだった。それでも自分が聞こえないことを認めたくないようで、こちらが疑問形で尋ねると何でも「ああ、そうだそうだ」と認めるため、一部の悪趣味な子供たちは面白がってよく彼に話しかけた。もちろんタケシもその子供たちの一員で、どんなおかしなこと

について「ああ、そうだそうだ」と言わせられるか互いに競っていた。

言い訳のようだが、私はこの遊びがそこまで好きではなかった。それでも、タケシといろいろなことをやるのは面白かったし、彼のことは無鉄砲なところはあがるが、良い友人だと思っていた。

ある日の放課後、私とタケシは集団下校で家に帰る際、例の民家の前を通りがかった。

「なあ、あの爺さん、今日は何やってんだろ」

タケシが含み笑いをして指さした先では、例の老爺が彼の家の玄関扉の前に立っていた。泥のついた白い長そでのポロシャツに汚れて土の色になっている長ズボン、軍手をつけて、長靴を履いている。白いタオルをほっかむりのように被り、腕を組んで太陽を見上げ、何やらぶつぶつと言っているようである。

「また田んぼに入ろうとしているんじゃない？」

私は大した驚きもなく答えた。老爺の不思議な行動はいつものことで、少し変な格好をしているくらいではいまさら驚かなかった。むしろ今日の格好は奇抜でない方だと思う。農

作業をしている普通のお年寄りの服装とあまり変わらない。

「何だ、つまんねーの。んー」

そう言ってタケシは集団下校の列を離れ、老爺の方に向かっていった。家の方を指さし、何か小声で老爺に言っているような仕草を見せると、

「あーそうだそうだ」

と間延びした老爺の声が聞こえた。しばらくしてタケシが小走りで戻ってくる。

「なんて言ったのさ」

私はそこまで興味はなかったが、一応尋ねた。

「これから出かけるならその間ちよつとお邪魔してもいいですかー、って訊いた」

そういうタケシは、どこか神妙な顔をしていた。いつも老爺に返事を言わせた後は、大抵得意げな表情をしていたので、少し不思議に思った。

「何か、妙だった」

「何が」

首を傾げて、タケシは老爺の方を見やった。

「いつもはああそうだそうだって言ったら終わりじゃん。でも今日はその後に、あんただけじゃなくてお友達とぜひどうぞ、って言ったんだぜ、あの爺さん」

「え、歓迎されてるの？」

目を見開いて大きさに驚いた表情をすると、不意にタケシが嘔き出す。

「ちよつと、お前その顔は反則」

「やった」

その後は、ふざけあって変顔の応酬が続き、気が付くと二人の家の近くまで来ていた。

集団下校の列が解散になって、二人で歩いて帰る途中、タケシのお母さんに出会った。落ち着いたスーツ姿で、仕事用の大きな黒い鞆を肩から掛けている。私たちの姿を認めると、手を振りながら駆け寄ってきた。

「二人とも、お帰り」

「ただいま、今から仕事？ 今日遅いんだね」

タケシが尋ねる。確か、彼のお母さんは定時制高校で教師をしていたはずだ。大体いつも昼過ぎには出かけるとタケシから聞いていた。

「おばあちゃんの具合が突然悪くなっちゃったから、ちよつと様子見てたの。はいこれ鍵」

そう言ってタケシに押し付けるように鍵を手渡す。そのままヒールの靴を走りづらそうに地面にぶつけて駆けていった。

「お祖母ちゃん、最近調子悪いの？」

時々お菓子をくれた、優しく笑ってしわくちやになった顔を思い出す。タケシは両親と彼、そして祖母の四人暮らしだった。お祖父さんは五年くらいに亡くなったらしく、私はあまりよく憶えていない。最近はその家に行く機会もなく、お祖母さんとはしばらく会っていなかった

「いや別にそうでもない。ただなんか最近足腰がすごい痛む、っていうも言ってるな。でもそれ以外はいつも通りだぜ」

そういうタケシの横顔は自然とほほ笑んでいた。

「そうかー」

お祖母さんについて話すとき、彼は時々とても幸せそうな表情を見せた。祖父母が既に亡くなっている私は、タケシが時々羨ましくなる。

そのうち、二人の家路の分かれ道に差し掛かった。

「今日もまたいつもの神社集合な」

いつもの通り私に告げて、彼は自分の家に帰っていく。

「分かった」

私も手を振ってそれに答え、あと少し、家までの道を急いだ。

家に帰ると、姉が台所で料理をしていた。心なしか慌ただ

しく、野菜を刻んでいつている。

「どうしたの」

台所を覗き込んで、私は尋ねた。

「父さんも母さんも今日仕事で遅いでしょう。誰もご飯作れないから、作っておこうと思つて」

「そうなんだ」

「おやつはこの棚の上に置いてあるよ。昨日と同じで悪いけど。飲み物は牛乳が冷蔵庫にあるから」

卵をかき混ぜていた菜箸の先で示して、一目こちらを見ると、すぐに姉は料理に戻つた。

棚の上のクッキーに手を伸ばす。姉が数日前の日曜に焼いていたもので、プレーンとチョコレートのマーブルになっている。クッキーは姉の得意料理の一つで、たまに焼いてくれるのが楽しみだった。

姉は休日にお菓子を作ることが多かった。また、平日の夕食もしばしば作ることがあった。母の帰りが頻繁に遅くなるため、半分は実利を兼ねた趣味のようなものだったのかもしれない。その腕前は、彼女に最初に料理を教えたはずの母のそれを既に追い越していた。

牛乳を取ってくるために姉の横を通り、冷蔵庫に向かう。ステンレスのトレイに広げられたパン粉を見て、期待しながら

ら訊いた。

「今日の晩御飯何？」

「コロッケよ」

「やつた」

思わず口に出てしまうほど、嬉しくなる。姉の作るコロッケは、私の大好物だった。どんなお店で買ってきたコロッケよりもおいしい。あのサクサクの食感と、なんとも言えないほくほく加減を思い出す。

「裏のお婆ちゃんがジャガイモくれたのよ。また会ったらお礼言つときなさい」

「分かった」

ふと時計を見ると、既に帰ってきてから三十分が経とうとしていた。急いで残りのクッキーを口に入れ、ちよつともつたいないと思いつながら、コップに残った牛乳で流し込む。

適当に持ち物をリュックサックに詰めて、玄関に向かった。

「それじゃ、遊んでくる。行つてきます」

「今日は晩御飯ちよつと早いから、六時には帰ってきてね」

「分かったよ」

自転車に乗って、私は急いでいつもの神社へと向かった。

神社に着くと、既にタケシが石段に座って待っていた。

「遅いぞ」

少し苛々しているようで、しきりに足を揺らしている。

「ごめんごめん」

いつものことであるし、すぐに気が変わるのが分かっているため、軽く流して隣に腰掛けた。

「で、今日は何するよ」

案の定タケシはワルの笑みを浮かべてこちらを向く。

「ユースケとかが学校でドッジボールするって言ってたし、その辺に混ぜてもらおう」

「んー。なんか最近面白いことやつてないし、何かないか？」

「そんな、特に何も思いつかない」

面白いこと、というのは例のいたずらのことである。いつもはタケシの発案で、私が仕方なくついていく感じなのだが、時折私にアイデアを求めてくる。私自身は正直気乗りしないのでいつも何も答えないのだが。

「ちえつ。つまらないな」

露骨に不満げな顔をタケシはこちらに向けてる。

「そう言われてもさ、別にないよ。そんなに何かしたいんだったら君が考えればいいだよ」

「だって何も思いつかないんだよ」

「ほら見ろ、自分だって何も思いついてないじゃんか」

「あ、おい。少し静かにしろ」

突然、タケシが私の背後を指さして目を見開いた。振り返ると、例の老翁がスコップを持って立っていた。先ほどと同じ、全体的に薄汚れた作業着に、滅多に見ないほっかむりが目を引く。こちらには気づいていないようで、境内の地面を眺めながらゆっくり歩いている。

「こつち、早く隠れる」

自分はすぐさま神社の狛犬の台に身を隠すと、タケシは私を手で呼んだ。急いで隠れて老翁の方を見ると、ちょうど境内にある石碑の前で立ち止まったところだった。彼は微動だにせず石碑を注視している。

「気づかれてないよな」

「多分。いつからいたんだろう」

「さあ」

神社の後ろは山になっていて、境内に入るための入り口は私たち二人がいた石段しかない。老翁が来たのならば気が付かないはずがないから、おそらく私たちが来る前から彼はいたのだろう。割と大きな声で話していたつもりだが、全くの無反応だったのは、やはりあの老翁らしいと言えそうなのだろうか。

「お、何だ」

タケシが少し嬉しそうな声を上げる。見ると、あの老爺がスコップを構え、地面に突き刺そうとしていた。

静かな境内に、スコップで土を掘る音だけが響く。老爺は無心で穴を掘っているようだった。

「石碑を掘り倒そうとしているのか？」

「あーそうかも」

スコップの先は徐々に石碑の根元に近づいていつている。やがて、土を掘る音に混ざって、石と金属がぶつかる音が聞こえ始めた。

ふと神社の建物の方を見ると、見るからに古い木のリアカーが停めてあった。

「もしかして、あれ使って石碑を持って帰ろうとしてんじゃないの？」

リアカーを指さしてタケシが言う。確かに、何とか載せられそうな大きさではある。

「いやでもさすがに無理じゃないの。まず、運べないし」

「そうだな」

老爺はそのまま石碑の根元を掘り進め、やがて石碑の地面に埋まっている部分の端が見え始めた。掘っている面の両方の角が見えたとき、老爺はほっかむりを取って汗を拭いた。

大きく息をついて石段の方に向かってくる。

不意に、老爺の顔がこちらに向いた。咄嗟にさらに隠れることもできず、私たちと老爺は完全に対面する形になった。

ぎよっとした表情を浮かべた老爺はその場に固まった。私も思わず身体を固くしてしまった。

「行くぞ」

タケシが私の腕を引く。はっと我に返り、二人で走って停めである自転車へと向かった。急いで自転車に飛び乗り、全速力で漕ぎ出す。

しばらくしてから後ろを振り返ると、老爺は先ほどと同じ姿勢で立ちすくんでいた。その姿がなんとなくおかしくて、緊張が解けたこともあって笑いだしてしまった。前を走るタケシもつられて笑っている。

完全に老爺が見えない場所まで来たとき、タケシはスピードを緩めて、私の自転車と並列に走りだした。

「よく考えたら別に逃げなくても良かったな」

「そうだね、いつもあんな感じだしな」

鬼気迫る様子に押されてしまったが、確かに逃げる必要はなかった。

「というか、そもそも隠れなくて良かったな。気づかれても別にどうってことないし」

「そうだなー」

よく考えてみれば、老爺と会うのは登下校中のような子供たちが集団でいるときで、私とタケシの二人のような少数人数で見かけたことはなかった。それに、彼の不思議な行動をあらんな間近で見ることになったのは初めてだった。

「とりあえず、これからどうする？ やっぱり学校行く？」

俺はもうどっちでもいいや。なんかもう十分楽しんだ感じ」

タケシが笑顔を浮かべて言う。確かにもう遊びに勝る不思議な体験を十分したような気はする。時計を見ると、まだ夕食の時間まではおよそ一時間と少しの余裕があった。少し迷ったが、

「どうせだし学校行こうよ」

と答えた。

「そうか、お前が行くなら俺も行くぜ」

自転車を一杯に漕ぎ出すと、タケシが急いで後ろからついてくる。

このまま帰ってしまうと、老爺の妙な雰囲気家をそのまま持って帰ってしまうような気がしたのだ。あの時は、一度他の友達と時間を過ごして、いつもの日々に戻りたい気分だった。

後から思い出すと、この瞬間は一つの分岐点だった。もし

あの時、と不意に頭に浮かぶ際、最初に後悔するのはいつもこの瞬間である。

しかし、過去は変えようがない。この時の私は間違いなく、学校に行く道を選んでしまったのだ。

学校に向かうには、田んぼに挟まれた長い道路をずっと歩いていく必要があった。通学路になっているその道路は舗装されて歩道もついていて、電信柱が道沿いに並んで立っていた。無数の農道がその道に交差するように脇から延びている。そのいくつかは田んぼの真ん中に建つ民家につながっていたり、山道へつながっていたりしていた。そのうちの一つに、あの老爺が住んでいる大きな民家があった。

その民家の前を通り過ぎるとき、突然タケシが声を上げた。

「おい、玄関の戸が開いてるぞ」

自転車を止めて、タケシはその民家をじっと見ていた。慌てて私も自転車を止めて寄せる。彼は自転車から降りて建物の方へと歩いていった。

「ちよっと、どうしたんだよ」

私も急いで後を追う。玄関の前まで来ると、彼は半開きになっている引き戸の陰に隠れるようにして中を覗き込んだ。

「おい、何やってるんだよ。早く行こう」

私は彼の肩を掴もうとした。

「ごめん下さーい。誰かいませんか？」

家の中に向かってタケシが呼びかける。開いた扉の先に見える薄暗い廊下に声が響いた。返事はない。中は静まり返っていて、人の気配はなかった。

「どうしたんだよ」

私の手が彼の肩を捉えた瞬間、彼はつぶやくように言った。

「なあ、あの爺さん、しばらくは帰ってこないよな」

「だから何さ」

嫌な予感がした。彼の顔を見ると、目が心なしか輝いている。この好奇心といたずら心がないまぜになったような表情を、私は時々見たことがあった。そう、何か新しい面白そうないたずらを思いついた、そういうった時のような。

「なあ、ちよつと探検してみようぜ」

そう言っただけで、肩に伸ばした私の手を取った。

「嫌だ。やめとこう」

「どうして。あの爺さんがいつも土を持って帰って何をしているのか、お前だっけ知りたいだろ？」

「別に」

掴まれた手を振りほどこうとしたが、彼の力は意外と強く、

振りほどくに至らない。

「ちよつと忍び込むだけだぜ。こんな機会なかなかないだろ？」

あの爺さんは石碑掘ってるし、ここは神社からある程度距離あるから帰ってくるまでしばらくかかるしさ。他の家だったら大分怒られるかもしれないが、相手はあの爺さんだ。たとえ怒られたとしても、そんなの怖がるほどじゃない。ちよつと行ってすぐに戻ってくるだけだからさ」

「何言ってるんだよお前。さすがに駄目だろ、人の家に勝手に入っちゃ」

「大丈夫大丈夫。それにさっきあの爺さん、どうぞって言うてたんだから」

軽い口調で、視線は戸の先に向けたまま返す。もうそれ以外に興味はないという様子だった。

「本当、やめておこうよ。どうなるか分からないし。学校行って普通に遊ぼう」

「そんなに行きたくないのか？」

「行きたくない」

きっぱり言う。彼のいたずらに付き合うときは大体流されてしまっていたが、今回は流石に度を越しているように感じた。それに、この時既に、確かに嫌な予感を感じていたのだ。

「ふーん。お前って意外と怖がりだな」

じつとりとタケシはこちらを見る。完全に煽る態勢になつてしまっている。

「そんなこと言われたって動じないからな」

「何だよ。じゃあ、俺一人で行く」

そう言つてタケシは掴んだ私の手をはねつけるように離し、そのまま入り口に向かつていった。靴を脱ぎ、背負つていたリュックサックに詰める。

「お邪魔しまーす」

小声でつぶやくと、廊下の先を一瞬覗き見た後、そろりと奥へと歩を進めていった。

「ああもう」

どうしていいか分からず、私はしばらく立ち尽くしていた。一人で逃げてしまうこともできたが、このままタケシだけを放つておく訳にもいかない。タケシが出てくる前に老爺が帰ってきて、忍び込んだことに気づかれたら、きつと大目玉を食らうだろう。かといつて、彼の後に続くこともためらわれた。別に老爺が怖いのではない。ある程度放任されているタケシと違い、私の両親は悪いことに対して本当に厳しい。今までのちよつとした悪戯は黙認されてきたが、流石に他人の家に忍び込んだとなると雷が落ちることは目に見えていた。

それからしばらく逡巡^{しゆんじゆん}していたが、道路の学校に向か

う方向から車がやってきたのに気づいて、このままタケシの自転車を放置しておくのは不自然じゃなく考えついた。車が遠くに通り過ぎ、他の車や人の目がないのを確認してから自転車を草むらの陰に持つていく。稲刈りの終わった田んぼの畔は背の高いススキがたくさん生えていて、何とか見つけられずにごまかせそうだった。

一旦隠し終えると、タケシがだんだん心配になってきた。時計を見ると、中に入ってから既に十五分は経っている。早く出てこなければ、きつとあの老爺に見つかってしまうだろう。

「仕方ない、行こう」

気は進まないが、中に入ってタケシを引っ張り出してきた方がいいように感じた。ただ怒られるだけで済めばいいが、何か嫌な予感がしてならない。入って、見つけ出して、叩いても連れて帰ってくる。それが一番無難な気がした。ため息をつきながら、私は玄関の敷居をまたいだ。

玄関の外からも見えた薄暗い廊下は、思ったよりも長かった。正面から見ると横長に見える家だが、意外と奥行きもあるようだった。

静かに音を立てないように歩いていく。タケシの名前を呼んでみようかとも思ったが、気が付いていないだけでもし人がいたらと思つてやめた。一度他に人がいる可能性を考えると、急に不安になってきた。そもそも、この家はあの老爺夫婦が住んでいると聞いていたから、老爺の妻にあたるお婆さんがいたとしても不思議ではない。そう考えると、本当に大変なことをしているのだ、と後悔が募った。あの時引きずつてもタケシを止めていればこんな面倒なことしなくても良かったのに。それに、たとえ誰もいなかったとしても空き巣と同じなのには変わらない。考えれば考えるほど、罪悪感で胸が詰まりそうだった。

廊下の側面には時折襖があり、そのすべてが開いて中が見えるようになっていた。襖を見つければタケシの姿がなにか覗き込んで確認する。中に入って改めて思ったが、本当に大きな建物である。一階だけでも部屋が七つも八つもある。しかし、どの部屋もほとんど手入れされていないようで、畳に埃がうっすらと積もっていた。

妙なことに、どの部屋も中央に一メートルくらいの高さの土の山が積まれていた。そのいくつかは頂上から穴が開けられて崩れている。それに加えて、畳の一部がスコップか何かで掘つたみたいに大きくえぐれている部屋や、部屋の四隅にサッカーボールくらいの高さの石が置かれている部屋も

あった。ただただ不気味で、今すぐにでも逃げ帰ってしまいたかったが、異様な光景を目にするたびに、タケシは本当に大丈夫なんだろうか、という思いが強くなっていった。早く見つけて、すぐに帰ろう。そう考えて無心にタケシを探し続けた。

廊下の突き当りに差し当たり、あたりを見回す。右手には二階へ続く階段があり、左手には台所や風呂があるようだ。台所の方を一目見たが、静かでタケシがいるようには思えなかった。おそらく二階に行ったのだろうと考えて、可能な限り静かに階段を上った。

階段の上の方まで上がってきて、どきりとした。急に人影が見えたのだ。すぐに大きな鏡だと気が付いて胸を撫で下ろす。一瞬、住んでいる人に見つかったのかと思つた。

二階まで上りきつて改めてそれが鏡だと確かめる。私の全身が映るくらい大きな姿見で、その先の廊下を完全に塞いでいる。全体的に土埃で汚れて薄く曇っていた。よく見ると姿見の後ろにはさらに巨大なコンクリートの壁がある。姿見はそれにネジで無理やり固定されているようだった。家本来の土壁とコンクリートの壁の間は雑ながらも執拗に、隙間なく埋め込まれている。そして何より、鏡の前にある一際大きな泥の山が目を引いた。山の頂上は私の腰の高さまである。上っているときは気が付かなかったが、床には土嚢が十個ほど鏡

を押さえつけるように積まれていた。

泥の山を慎重に何とかまたいで越える。バランスを崩した拍子に鏡に手を触れてしまい、土埃が付いた。軽く払った後、鏡の左右を見回す。両側にはそれぞれ一つずつ曇りガラスの引き戸があり、その先には何かの部屋があるようだった。タケシがいるとしたらそのどちらかだろう。私が右側の戸に手を掛けたとき、左側の部屋から微かに音がした気がした。

タケシだろうか。向き直って、左側の戸に改めて手を掛ける。音を立てないよう戸をほんの少しだけ引いて、隙間から中を覗き込んだ。

どうやら寝室のようだった。階段のある方向に細長い、やや広めの部屋で、窓際に花柄のダブルベッドが鎮座している。畳に窓からレースのカーテン越しに入ってくる光が淡く反射している。窓の横の壁際には、天井とほぼ同じ高さの高級そうな衣裳箆だんすが置かれている。くすんだベージュのカーペットに、何かを引きずったような跡がついていて部屋の奥へと続いていた。跡の先に目を移したとき、私は思わず息を飲んだ。

壁沿いに置かれた鏡台に向かって、女が一心不乱に化粧をしていた。椅子に座っているからよく見えないが、全身黒一色で、カーディガンを羽織って、ゆったりとしたロングスカート履いているように見える。髪は腰のあたりまで伸びてい

て、激しく掻き毟むしったかのようにくしゃくしゃだった。不思議なこと、首のあたりまでの髪の毛は赤みがかつていて、それより先は真っ黒である。鏡に映った顔は背中であって確認できない。最初はあの老爺の妻じゃなくかと思っただけ、後ろ姿で判断するに、それよりはやや若いと感じた。大体三十代から五十代くらいの間だろう。こちらに気づく様子はなく、ただ一心に手を顔の前で左右に動かしている。

その異様な雰囲気にはしばらく気圧されていたが、ふと我に返り、背筋が冷たくなる。誰かは分からないが、あの女はこの家の住人で間違いないだろう。もし見つければ、叱られることは確実である。女の様子からまだタケシは気づかれないようだ。早く彼を見つけて、すぐにこの家を出なければ。この部屋にいなかったのだから、反対の部屋にすることは間違いない。隙間から顔を離しかけたとき、肩に何か柔らかいものが触れたのを感じた。

「いつ」

思わず身体をのけぞらせてしまい、胸を戸に思い切りぶつけてしまった。大きな衝撃音が響く。痛みに顔を引きつらせて振り向くと、タケシが焦った顔でこちらを見ていた。

「やばい、気づかれた」

タケシは放心している私の手を乱暴に掴んで階段の方に向

ろうとした。しかし、例の泥の山を踏んで足を滑らす。

「ちよつと、お前、何だよ」

タケシにつられて転んでしまい、私はさらに腕を戸にぶつけてしまった。痛みには耐えながら床に倒れ伏す。訳が分からずタケシに呼びかけたが、返事はない。彼の顔を見ると、恐怖で固まっていた。

音であの女に気づかれてしまったのではないか、と思ったときには既に遅かった。次の瞬間、部屋の戸が内側から引かれた。視線を向けると、先ほどの女がこちらを見下ろしていた。

女の顔は、一面染め上げたように鮮やかな赤色だった。黒い服に顔だけが浮いているようだった。眉毛はなかった。睫毛も一本もなかった。前髪は両側に分けられ、見える額もすべてが赤かった。分けられた髪でさえ、異様に赤く光っていた。首元も赤かった。耳すらすべて赤かった。見開かれた眼だけが白く、こちらを突き刺すように睨んでいた。

無表情で女は右手を上げ、口元へと持つていく。手にあったのは、強烈な赤色の口紅だった。女の顔と、耳と、首と、髪と同じ色だった。口紅の持ち手は黒く光を放っている。女は口紅で上唇をなぞり、次に下唇をなぞる。その後手を額まで持ち上げ、そのまま塗りたくった。既に赤いその額がさら

に赤で上塗りされていく。ひとしきり塗り終えると、女は口角を思いつきり上げ、目をやや閉じて嘗め回すように私たちを見た。

少しして、女がほほ笑んでいるのだと気が付いた。しかし、それは一見笑っているようには見えない不気味な表情だった。しばらく私たちを見比べるように眺めた後、女は突然しゃがみ込み、私の顔を近づけてきた。そこで私は初めて、自分の身体が固まってしまつて動けないことに気が付いた。顔を背けようにも、全く自由が利かず、思う通りにできない。女は吐息が感じられるまで近づいて、不意に体を引いた。

心臓が早く脈打っているのを感じる。女はそのまま私の右手を持ち上げ、また私の顔に近づけた。振りほどこうとしたが、どうやっても腕は動いてくれなかった。女は私の人差し指に口紅の先を近づける。少し迷うそぶりを見せた後、私の薬指に口紅の先をつけた。そのまま指に擦り付ける。薬指が先から根元まで女と同じ赤に塗られていくのを、私はなすすべなく眺めるしかなかった。

薬指が完全に赤く染まると、次に女は身体を起こして、タケシの方に向かって行こうとした。

その時、階段の下から、戸を開ける音が聞こえた。その音に反応して、女は急に顔を上げ、階段の方へ向かおうとして

いるようだった。

目で追うと、女は泥の山を踏みつけ、下の階へと降りていく。やがて不規則な足音が止み、二階は静まり返った。

「おい、大丈夫か」

タケシが身体を起こして尋ねる。彼の服は泥だらけだったが、怪我は特になさそうだった。

「何とか」

そう答えて首を動かす。いつの間にか身体が動かせるようになっていた。

「立てるか」

タケシは立ち上がり、私の手を引いた。地面に手をつけて、勢いをつけて立ち上がる。膝がまだしゃんとしないが何とか歩けそうだ。

「多分、戸の音がしたとき、あの爺さんが帰ってきたんだと思う。で、きつと今が逃げ出すチャンスだ」

そう言うと、タケシは泥の山を踏み越えて階段へと向かった。私もまだあまりきちんと動かない足を引きずりながらついていく。静かに階段を下りて、タケシはそのまままっすぐ、突き当りを台所の方に向かって行った。

「こつちに勝手口があった」

突き当りに来たところで、私は玄関の方を一瞬だけ見た。

老爺があの大きな石碑を抱えてよたよたと歩いている。視線を前に戻そうとしたその時、あの女と目が合ってしまった。

女は口角を思い切り上げて目を細めると、滑るようにこちらに向かってきた。

「ちよっと」

私は思わず声を上げた。タケシが振り返り、女に気づいて慌てて走りだす。手を引かれるがままに私も急いで続く。勝手口の戸を乱暴に開けて二人で外になだれこんだ。

無言で建物の前まで走る。そこからは私がタケシを先導する番だった。自転車を隠した場所を指さし、すぐにそちらへ向かう。

とにかく急いで自転車を道路に戻し、家の方向へ向かって漕ぎ出した。一刻も早くあの家から離れるために、一目散に自転車を走らせた。

老爺の家がかなり遠くなつてから後ろを振り返ってみたが、中から誰かが出てきたような様子ではなかった。

近所まで帰ってくると、そのままタケシと別れてそれぞれ家に帰ることにした。時間も私が帰ってくるように言われた六時を少し過ぎてしまっていたし、早く家に帰って落ち着

きたかったのもある。また明日にでも今日あったことを話そうと約束して、お互いに家路に着いた。

「今日見たあの女は何だったんだろう」

別れる直前、私がつぶやくと、タケシは顔を歪ませて息を吐き、

「分らない」

とだけ答えた。

家に帰ると、時間に遅れたことについてまず文句を言われた。次に、泥だらけになって帰ってきたのを姉に見咎められた。間違つて田んぼに浸かったと言い訳すると、呆れながら叱られた。

「とりあえずお風呂に入っちゃいなさい」

と言われたのに従つて、説教の後すぐに風呂場に向かった。

薬指が赤いことについて姉が何も言わなかったのが気になったが、そんなことより不快な口紅の感触を一刻も早く洗い流してしまいたかった。それにねっとりとした泥と土埃からも解放されたかった。

ズボンを脱ぐとき、不意に何か動いたような気がしてポケットの中を確認すると、なぜか口紅が入っていた。驚いて思わず取り落としてしまう。恐る恐る持ち上げ、黒い筒身を回して少し出してみると、薬指についているのと同じ鮮やか

な赤色だった。あの女の顔が脳裏をよぎり、思わず脱衣所の扉を開けて洗面所の方へと放り投げてしまった。とりあえず忘れて、薬指の汚れを落とそうと思つた。

風呂で石鹸せっけんを使って洗つて、泥と土埃は完全に落ちた。しかし、薬指の口紅だけは、いくら念入りにこすつても落ちなかった。

途端に気味が悪く思えてきて、風呂から上がるとすぐに姉に口紅を落とすためにはどうすれば良いか尋ねた。

「クレンジングを使えば取れると思うけど……どうしたの？」

姉は不思議そうな顔をしていた。私は姉に口紅に染まつた右手の薬指を見せた。

「ほら、口紅がついてるんだけど……」

姉の表情が怪訝なものに変わった。

「ついてないよ。何言ってるの」

そんなはずはなかった。私の薬指は完全に赤いままだった。

「いやついてるって」

「私には見えないんだけど。からかうのはやめてよ」

それでも食い下がると、

「変なこと言わないでよ気色悪い。ついてないじゃん。そんな言うなら洗面台の所にクレンジングあるからさあ。あんた今日疲れてじゃないの？」

とちよつとうんざりしたように言われた。

「それじゃ、私もうすぐ出るから。悪いけど、晩御飯は一人で食べて」

「どこ行くの？」

「中学の時の同窓会。みんなでちよつと喫茶店で集まろう、つて話になってね」

「ふうん」

姉はそれから洗面所に行つて何かごそごそやっているようだった。私は姉特製のコロッケを味わいながら、今日の夕方にあつた出来事に思いを巡らせた。

しばらくして、姉が洗面所から戻つてきた。

「口紅つけてるの？」

私は少し気になった。姉の唇の赤が異様なほどに鮮やかに見えた気がした。まるでただの口紅ではないような。

「うん。せっかくの同窓会だし、ちよつとおしゃれしてみようと思つて。鏡台の所に母さんの口紅が落ちてたから、ちよつと借りたの。似合う？」

「うーん、なんかちよつと怖いかも」

「可愛い？ ありがと。あんたもなかなか気の利いたこと言えるようになったじゃん」

椅子の上に置いていた彼女の手提げ鞆を持って、姉は玄関

に向かった。居間を出る直前に私の方を振り返る。

「それじゃ、行つてきます。あんた今日ちよつと調子悪いみたいだから早く寝なよ」

「分かった、行つてらっしゃい」

姉は満足げに頷いて、玄関から出ていった。

姉の聞き間違いを訂正する機会が掴めず、私はしばらく呆然としていた。

コロッケを十分味わつて食べ終えた後、歯を磨こうと洗面台に向かうと、あの口紅がなぜか洗面器の水の中に浮いていた。不安に思つたので、ティッシュでつまんで生ごみを入れている袋の中に放り込んでおいた。

その後もう一度薬指を念入りに洗つたが、結局口紅は落ちるどころか、色が薄くなることさえなかった。私はずっと洗い続けたが、母が帰つてきたので一旦諦めた。思いついて母に薬指を見せておかしなことがないか尋ねてみたが、母は、「特に何も変なことはないじゃない」とだけ答えた。

姉の言う通り、やっぱり疲れているのかもしれないと思つて、私はいつもより一時間早く布団に入った。

異変は次の日の朝にはもう始まっていた。目覚めて居間に向かい、姉の顔を見ると、唇が昨日出かけたときと同じように赤いことに気が付いた。

「もう出るの」

私が尋ねると、姉は眠そうに返事をした。

「まだ朝ご飯も食べてないしー。着替えてないしー。準備もまだ」

確かに、まだ姉は部屋着のままだった。

「でももう化粧したんでしょ？」

「いんや、うちの学校化粧禁止だし」

「じゃあ昨日の口紅落ちてないんじゃないの。鏡見てみなよ」

「んー面倒だなあ」

洗面所に行って、しばらく水音がした後、姉は居間に戻ってきた。顔を洗ったおかげで先ほどより意識はすっかりしたようだったが、唇は依然として赤いままだった。

「ほらやっぱ唇赤いじゃん」

「これが普通じゃんか。いっつも大体こんな色だよ。ねえ母さん」

「ええ、そうね。いつもそんな感じよ」

母が心なしかゆっくりとした口調で言う。私が衝撃を受けて黙ると、すかさず姉が続ける。

「やっぱりあんた疲れてるよ。ちゃんと昨日早く寝た？ まだ指に口紅ついてる？」

「……もういい」

おかしいのは姉と母の方だと思ったが、それ以上は言わなかった。右手の薬指を確認すると、まだ赤いままだったけれど、微妙に昨夜より色が薄くなったように感じた。

異変は続いた。いや、徐々に進行していったといった方が正しい。

二日後には、姉が口紅を塗る範囲が唇から少しずつはみ出し始めた。四日後には、鼻の頭の方まで口紅を塗り始めた。二週間経つと、目より下の部分は全て赤く塗りつぶすようになり始めた。

異変を感じて数日後に、私は姉が使っている口紅を確認することにした。姉の目を盗んで彼女の部屋に入ると、以前はなかった卓上鏡が三つ、まるで即席の三面鏡のように配置されていた。心臓が嫌な鼓動を打つてもう部屋から出てしまいたかった。しかし、ここでやめてはいけないと何とか気を保つて机の引き出しを開けてみると、黒い筒身の口紅が一つ見つかった。それは私があの家に行った際に持って帰ってきてしまったもので間違いなかった。

さらにおかしかったのは、姉が明らかに常軌を逸した口紅の使い方をしている、私以外の誰もそれを指摘しなかった

ことだ。私が指摘すると私がおかしいように扱われる。家族はもちろん、近所の人や姉の同級生さえも、さも当然という様子で口々にこう言った。「いつもこうだったじゃない」と。

異変は止まることなく進んでいき、一か月後には、姉は顔全面に口紅を塗るようになった。私は口紅を捨てたり金づちで叩き壊したりライターで焼いてみたり思いつく限りのことをやったが、次の日には何事もなかったかのように同じ口紅が姉の手にあった。そして前と変わらずに使い続けた。やがて姉は上下とも黒い服しか着なくなり、髪を伸ばし、その上髪にも口紅を塗るようになった。もうそうになると、一見した分には私がああ屋敷で見た例の女と違いが見当たらなかった。この頃になると姉はもう始終口紅を持ち歩くようになった。と言っても靴や服のポケットに入れてではない。直に口紅だけを常に手で持って行動していた。そのうち暇さえあれば顔に塗りたくるようになった。

姉はもう元の姉とは言えなかった。もともと口数が多い方ではなかったが、さらに無口になり、ついには食事と口紅をつける際以外は口を開くことすらなくなった。半年後にはもう意思の疎通はほぼ不可能だった。

私の薬指についていた口紅は、姉の異常の進行に比例するように消えていった。しかし、いろいろな人に見えるかどうか尋ねてみたが、誰も見えないといった人はいなかった。一晩明けて学校に行ったときには、塗られた所を見ていたタケシですら見えないと言った。

タケシと言えば、もう一つおかしいことがあった。屋敷に忍び込んで数日間それについて彼と話したときは、彼はあの女は化け物の一種ではないか、というようなことを言っていたのである。三か月くらい経った後に、その話題になった時、彼は青ざめた顔をしてこう言い放ったのだ。

「あの家でお前の姉さんに会っただろ？ 多分あれが原因なんだ。うちの母さんと祖母ちゃんがどっか行っちゃったのは」それを聞いて、私は頭の中が真っ白になった。気が付けば彼を滅茶苦茶に殴っていた。制止の声は聞こえなかった。先生に無理やり止められるまで、私は理性を失っていた。

そもそもタケシが忍び込もうと言い出しさえしなければ、姉はあんな風にはならなかったはずなのだ。そう考えると、彼の顔を直接見ることができなくなった。同時に私は自分も責めた。もしあの時、と思う瞬間はいくつもあった。そのどこかで違う選択をしていれば、姉はずっと姉のままであったはずなのに。姉に起こった異変は、間違いなく私にも原因があるのだ。

数年経つと状況はさらに酷くなった。即席の三面鏡では飽き足らなくなったようで、姉は基本的に母の寝室に閉じこもり、食事以外は鏡台の前で顔に口紅を塗りたくって過ごすようになった。大好きだった料理もしなくなり、あの日を最後に姉のコロッケが食卓に並ぶことはなかった。

タケシとは私が一方的に殴ってしまったことから疎遠になってしまった。中学入学の際に彼は父親の仕事の都合で別の県に引っ越したため、会うこともなくなった。以前妙なことを言っていたが、私の記憶の中では彼はずっと父親と二人暮らしだった。そのため、私の家のように父親だけ単身赴任、という選択肢はなかったのだろう。

中学一年生の時に、例の老爺が亡くなった。その数か月後、老爺の家から年配の女性のものらしい白骨遺体が見つかったと聞いた。

亡くなったと推定された時期が私たちが屋敷に忍び込んだ日と被っているのは、やはり何か関係があるのだろうか。

ある日、姉を鏡台から引き離すことができれば異変の進行を元に戻せるのではないかと考えてやってみることにした。姉を何とか部屋の外に引きずり出し、食器棚で部屋を塞ぐ。食器棚には動かせないように砂利を詰めておく。もしかしたらと思つて、すぐに準備をして実行した。

結果は失敗だった。食器棚のバリケードはものの数分で無

理やり破壊された。姉は手から出血していたが、お構いなしで鏡台に駆け寄り、再び口紅を塗りたくり始めた。

私は無力感に打ちひしがれた。結局何をやっても駄目なんだと半ば悟った。それに、あまり無理にやるときつと姉を傷つけてしまう。もう私に姉を戻す策はなかった。数日後、姉は鏡台を引きずって自分の部屋に移動させた。

もうすぐ高校に上がるかという頃、父が初めてバケツに土砂を入れて持って帰省してきた。どうしたのか訊いてみると、父は言われて初めてそれを持ってきたことに気が付いたようだった。どきりとしてそれ以上何も起こらないことを願ったが、それも空しく父はそれ以来何かに憑かれたように土砂を家に持ち込むようになった。さらにはそれ以来家にずっと住みつき、他県の仕事に二度と行くことはなかった。

母の存在はいつの間にか消えていた。これは今でも訳が分からないことなのだが、気づいたら母がいないのが普通になっていた。日々の料理をする人がいなくなっていたのに違和感はなく、気づけば私は料理を覚えていた。母がいた痕跡はまだ家の中にあるのに、その主の姿は思い出した時には既に消えていた。

後になって聞いた話だが、例の老爺の家には、もともと息子夫婦も住んでいたらしい。しかし、十年くらい前に息子の方が一人だけ家を飛び出してそれっきり帰ってこなかったそ

うだ。

家族三人の惨状を見て、私は心底恐ろしくなった。後悔や責任に押しつぶされそうな時期もあったが、行くところまで行くともうそれらを抑える術を自然と頭が覚えたみたいだった。感じるのはただただこの異常な状況に対する恐怖と、とても嫌悪感のみ。このままでは私も一緒に駄目になる。

いつしかそんな思いにとりつかれて、必死に勉強して、大学に行つて実家を出られる時を待ちわびた。できるだけ遠くの地域へ。そう思つて、ほとんど家に帰らずに、学校にこもつて努力した。何とか希望の大学に受かり、私はすぐに家を出た。それ以来私は実家に帰らなかつた。おかしくなつてしまつた姉と父、いつの間にかいなくなつた母、三人のことはできるだけ記憶の奥底にしまい込むようにした。学費も生活費も自分で全て稼ぐようにしたから、帰る必要もなかつたのはありがたかつた。落ち着いてやつと振り返ることができるようになったのは、大学卒業後に就職して仕事に慣れてきた時期だった。強い後悔と罪悪感。一度押し寄せてきた感情の波は決して引かず、私はそれ以来ほとんど常にそのことが頭にあつた。

それでも、そろそろ過去のことを清算して、前を向くべきかもしれない。いい加減、私の家族の幸せに水を差す存在にけりをつけたい、そう思つたのは一度や二度ではない。一度、

実家に帰つて三人がどうなっているのか確認するべきなのだろう。既に私も家族を持つ責任ある立場だ。昔のことにいつまでもこだわっているのも情けない。もしかすると、全てが私の夢や勘違いで、異変などどこにもなくて、今でも両親と姉は平穏な日々を実家で送っているのかもしれないのに。

妻にはこのことは一度も話さなかつた。だからこそ、彼女は私の両親に会いたがっている。このまま墓場まで持つていくつもりだったが、いい加減彼女の度重なる要望に対し考えしてきた言い訳も底を尽きかけている。このあたりで、一度帰省してみるのも、もしかすると必要なことなのかもしれない。私の今の家族のために。私の幸せの中で存在を主張し続ける一つの染みを拭い去つてしまうために。

実家に帰ると、姉と父は前と変わらなかつた。母はやはりいながつたが、二人はあの時から全く変化がなかつた。家は泥まみれになっていたが、想像していたほどでもない。

けれど、最悪だった。やはり私は行くべきではなかつたのだ。私の大事な家族を連れていくべきではなかつたのだ。

いたずら好きな私の娘。実家に着くとどこからか口紅を見つけて出てきて、気づいたら顔じゅうが赤く染まつていた。

慌てて取り上げた際に、私の小指が赤く汚れた。思わず取り落とし、口紅が床にぶつかる音が響く。それは、全てが崩れる音に聞こえた。

やはり私は認めることができない。認められる訳がなかった。二人暮らしには広すぎる私の建てた家の中で、常に鏡台に向かっていて一度も食卓を囲もうとしない、いつか見た赤い女。これが元は私の娘だったなんて。過去に置いてきたはずの赤い汚れが、明るかったはずの未来まで全て上塗りしてしまったなんて。